

天路山城跡

—比井漁港漁村再生交付金事業に伴う発掘調査報告書—

2020年1月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

序

天路山城跡は、紀伊半島の西側中央部に位置し、紀伊水道に面する日高郡日高町に所在しています。遺跡周辺に所在する比井王子跡や出土遺物である保元3年（1158）の年号を持つ法華経及びその経筒が国の重要文化財に指定されている比井経塚は、熊野詣における海の参詣道に関連した遺跡と言われています。また、近世においては比井浦・津久野湊は樽廻船によって栄えた地区として知られています。

天路山城跡は室町幕府の奉公衆で、中世から戦国時代にかけて日高地方で勢力を誇っていた湯河氏の城郭であり、湯河氏の城郭としては本城である亀山城跡及び湯河氏居館跡に次ぐ規模となります。

本報告書は、日高町が実施する比井漁港漁村再生交付金事業の道路改良工事に伴い、令和元年度に実施した天路山城跡の発掘調査成果です。本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場等で広く活用され、埋蔵文化財保護に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査から報告書の刊行に至るまでご協力いただいた関係諸機関並びに地元の方々に対して、厚く御礼申し上げます。

令和2年1月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

理事長 櫻井 敏雄

例 言

- 1 本書は和歌山県日高郡日高町津久野・比井に所在する天路山城跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は比井漁港漁村再生交付金事業に伴うもので、発掘調査業務及び出土遺物等整理業務は令和元年度に実施した。
- 3 発掘調査及び出土遺物等整理業務は、日高町の委託事業として和歌山県教育委員会（以下、「県教育委員会」という。）による指導のもと、公益財団法人和歌山県文化財センター（以下、「当文化財センター」という。）が実施した。
- 4 発掘調査及び出土遺物等整理業務に要した経費は、日高町が負担した。
- 5 現地調査及び聞き取り調査に際し、各関係機関並びに近隣の方々から多大なご協力を得た。また、発掘調査に当たっては、次の諸氏から多大なご指導・ご教示を賜った。
白石博則（和歌山城郭調査研究会）、水島大二（和歌山城郭調査研究会）
- 6 遺構・遺物の写真撮影及び本書の編集・執筆は濱崎が担当した。
- 7 発掘調査及び出土遺物等整理業務で作成した実測図・写真・台帳などの記録資料は当文化財センターが、出土遺物は和歌山県教育委員会が保管している。
- 8 発掘調査業務及び出土遺物等整理業務にかかる体制は以下のとおりである。
発掘調査及び出土遺物等整理業務（令和元年度）
事務局長（管理課長） 井上 挙宏 管理課主任 松尾 克人
埋蔵文化財課長 丹野 拓 発掘調査・整理業務担当者 濱崎 範子

凡 例

- 1 発掘調査及び出土遺物等整理業務は『財団法人和歌山県文化財センター発掘調査マニュアル（基礎編）』（2006.4）に準拠して行った。
- 2 調査及び本書で使用した座標値は、平面直角座標系（世界測地系）第Ⅵ系、標高は東京湾平均海面（T.P.）の数値であり、単位はmを使用している。方位は、座標北（G.N.）を用いた。
- 3 土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所監修 小山正忠・竹原秀雄著『新版標準土色帖』（2010年版）を使用した。
- 4 遺構・遺物の実測図の縮尺は、各挿図に明記した。また、遺構・遺物写真などの図版縮尺については任意であり、統一していない。
- 5 調査で使用した調査コードは、19-26・007-2（2019年度-日高町・天路山城跡）で、記載資料はこのコードを用いて管理している。

本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第2章 遺跡の位置と環境	1
第3章 調査の方法	2
第4章 調査成果	5
第1節 基本層序	5
第2節 遺構	5
第3節 出土遺物	8
第5章 まとめ	9
第1節 発掘調査の成果について	9
第2節 縄張り図から見た天路山城と「土居」と呼称される範囲について	10

挿図目次

図1 天路山城跡位置図	2	図6 調査区東トレンチ2断面土層図	6
図2 調査区位置図	3	図7 調査区南壁断面土層図	7
図3 調査区と地区割図	3	図8 西側トレンチ2石垣立面・断面土層図	7
図4 遺構全体図(1/150)	4	図9 出土遺物実測図	8
図5 調査区中央セクション断面土層図	6	図10 天路山城縄張り図(白石博則氏作成)	9

表目次

表1 発掘調査・出土遺物等整理業務工程	1	表2 出土遺物一覧	11
---------------------	---	-----------	----

写真図版目次

写真図版1 調査地遠景・全景	写真図版4 検出遺構・他
1 遺跡遠景(東から)	1 調査区西側トレンチ2石垣(南から)
2 調査地全景(北上空から)	2 南へ延びる境界土塁(北から)
3 調査地全景(北から)	3 土居近接地の五輪塔(南東から)
写真図版2 検出遺構	写真図版5 出土遺物
1 曲輪全景(北から)	
2 曲輪西側盛土断面土層(南東から)	
3 曲輪西側盛土断面土層細部(南から)	
写真図版3 検出遺構	
1 境界土塁と西側曲輪(北から)	
2 境界土塁断面土層(北から)	
3 調査区東側トレンチ1断面土層(北西から)	

第1章 調査に至る経緯と経過

日高町により比井漁港漁村再生交付金事業に伴う比井漁港集落道路改良工事が計画され、その建設予定地の一部に周知の埋蔵文化財包蔵地「天路山城跡」が所在していたが、文化財保護法第94条第1項に基づく通知がなされないまま工事が着手された。そのため、県教育委員会は文化財保護法の遵守と周知徹底について日高町に指導するとともに、天路山城跡について設計変更により現状保存を行うよう文化財保護法第94条第2項の規定に基づき協議を行い、その後工事の設計変更が行われた。しかし、道路の構造上天路山城跡への影響を避けることが困難であることが判明したため、県教育委員会が確認調査を実施することとなった。確認調査は、令和元年5月10日から5月31日にかけて延べ8日間で実施され、工事により破壊される範囲について記録保存のための本発掘調査が必要との判断がなされた。

本発掘調査は当文化財センターが受託し、土壤検査・伐木等のうち令和元年10月28日に現地着手し、同年12月3日に現地での作業をすべて完了した。12月12日には日高町教育委員会主催の現地説明会に伴い、当文化財センター担当者が説明に当たり、51名の参加を得た。その後、出土遺物等整理業務を実施し、調査報告書を刊行した。

年度	令和元年度													
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3		
契約期間					■									
発掘調査							■							
出土遺物等整理 報告書印刷期間									■					

表1 発掘調査・出土遺物等整理業務工程

第2章 遺跡の位置と環境

天路山城跡が所在する日高町は、和歌山県中央部にある日高平野の北端に位置している。海岸部は白馬山脈が紀伊水道に突き出た突端である日ノ御崎が隣接する美浜町との境界に位置しており、そこから由良湾に至るまでリアス式海岸を呈する。町内には弥生時代の高地性集落とみられる向山遺跡のほか、袈裟禪文銅鐸が出土したとされる向山銅鐸出土地、古墳時代の遺跡としては県史跡に指定されている向山1号墳・4号墳（弁天山古墳）等が所在する。中世以降は熊野古道の紀伊路上に位置しており、高家王子跡を含めた王子跡が所在しているが、陸路のみならず海路においても古くから日高町沖を通る海の参詣道が知られており、比井王子跡（13）や保元3年（1158）の年号を持つ法華経及びその経筒が出土した比井経塚（9）はそれに関連するものである。比井経塚出土品は、「紀伊王子神社経塚出土品」として大正6年、国の重要文化財に指定されている。近世においては比井浦・津久野湊は樽廻船によって栄えた地区として知られている。

天路山城跡は日高町津久野と比井にまたがる遺跡で、別名「比井城」とも呼ばれる。標高約70mの山頂に位置する主郭部を中心とし、南北の尾根に曲輪が階段状に築かれた大規模な山城で、湯河氏の城郭としては本城である亀山城跡に次ぐ規模を誇る。主郭周辺には土塁や石積みなどが良好に残されているほか、「土居」と呼称されている平坦地が主郭の南側山裾部に存在していることなどから、日高郡内では亀山城跡、手取城跡と並んで平坦部の居住空間と戦時における防御施設としての山城が一体となっ



図1 天路山城跡位置図

7 天路山城跡（比井城跡）

3 小浦1号墳 4 小浦2号墳 5 小浦Ⅰ遺跡 6 津久野遺跡 8 比井遺跡 9 比井経塚 10 比井1号墳
12 正行寺山古墳 13 比井王子跡 47 小浦Ⅱ遺跡 59 小浦城跡

た根小屋式城郭と見られ、一時的な戦闘に備えた周辺の山城とは一線を画している。

紀州藩によって近世に編纂された『紀伊続風土記』『紀伊国名所図会』によると、天路山城城主は湯河氏本流で亀山城最後の城主であった湯河^{なおはる}直春と伝わるが、比井浦の沿革をまとめた『古今年代記』によると湯河直春の従弟である湯河^{ひろはる}弘春とされており、また、天路山城跡の東に位置する比井若一王子神社には弘春を祀った摂社弘春社が存在することなどからも湯河弘春が城主であった可能性が高い。また、境内には湯河氏の先祖である武田氏を祀る玄古社もあり、この地域が湯河氏にゆかりの深い地域であることが分かる。

この他、日高町内には周知の埋蔵文化財包蔵地として63遺跡が知られているが、うち山城・狼煙台が13箇所と隣接市町と比較しても多く、日高地方における当地域の城郭を考える上で一つの特徴と考えられる。

第3章 調査の方法

調査地は、天路山城跡山頂にある主郭と山裾の「土居」と呼称される平坦部とのほぼ中間地点に位置しており、面積は360.0㎡である。調査では第1・2層としている表土及び旧耕作土とみられる土層については機械による掘削を行い、県教育委員会の確認調査で遺物包含層と確認された岩盤風化礫を含む第3層以下については人力で掘削を行った。



図2 調査区位置図

調査区壁面断面土層図については、縮尺 1/20 で作成した。写真撮影については 35mm フルサイズ デジタルカメラを使用し、調査区の全景等一部については中判デジタルカメラも併用した。この他、山城跡という遺跡の性格を考慮し詳細な地形記録のため、3次元レーザ測量を実施した。

調査区の地区割は、国土座標第VI系（世界測地系）を使用し、天路山城跡を網羅する北東に基点（ $X = -229,000 \text{ m}$ 、 $Y = -84,000 \text{ m}$ ）を設け、その点から東西に大区画・小区画を設けて区割を行った。大区画は基点を A 1 地点と定めて、西方向へ 100 m ごとに B、C、D…、南方向に 2、3、4…という

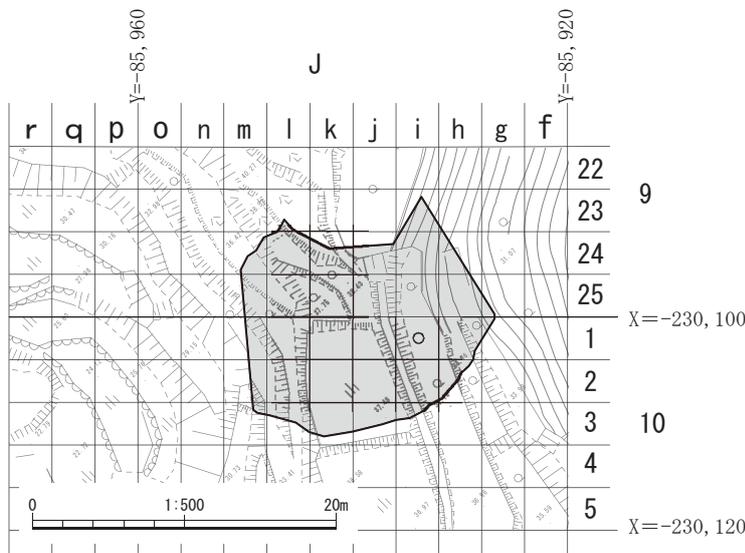


図3 調査区と地区割図

軸を設定した 1 辺 100 m 四方の区画で、北東隅の地区名を用いて A 1、C 3 などと呼称する。大区画の北東隅を a 1 地点として、そこから 4 m ずつ西方向へ b ~ y、南方向へ 2 ~ 25 とそれぞれの方向に 25 分割し、一辺 4 m の正方形区画を小区画とする。小区画は北東隅の地区名から a 1 区 ~ y 25 区と呼称する。地区名は、大区画 - 小区画 (A 1 - a 1 区など) で表す。今回の調査区は、大区画で J 9、J 10 の範囲内に位置する。

Y=84950

Y=84945

Y=84940

X=230,095

X=230,100

X=230,110

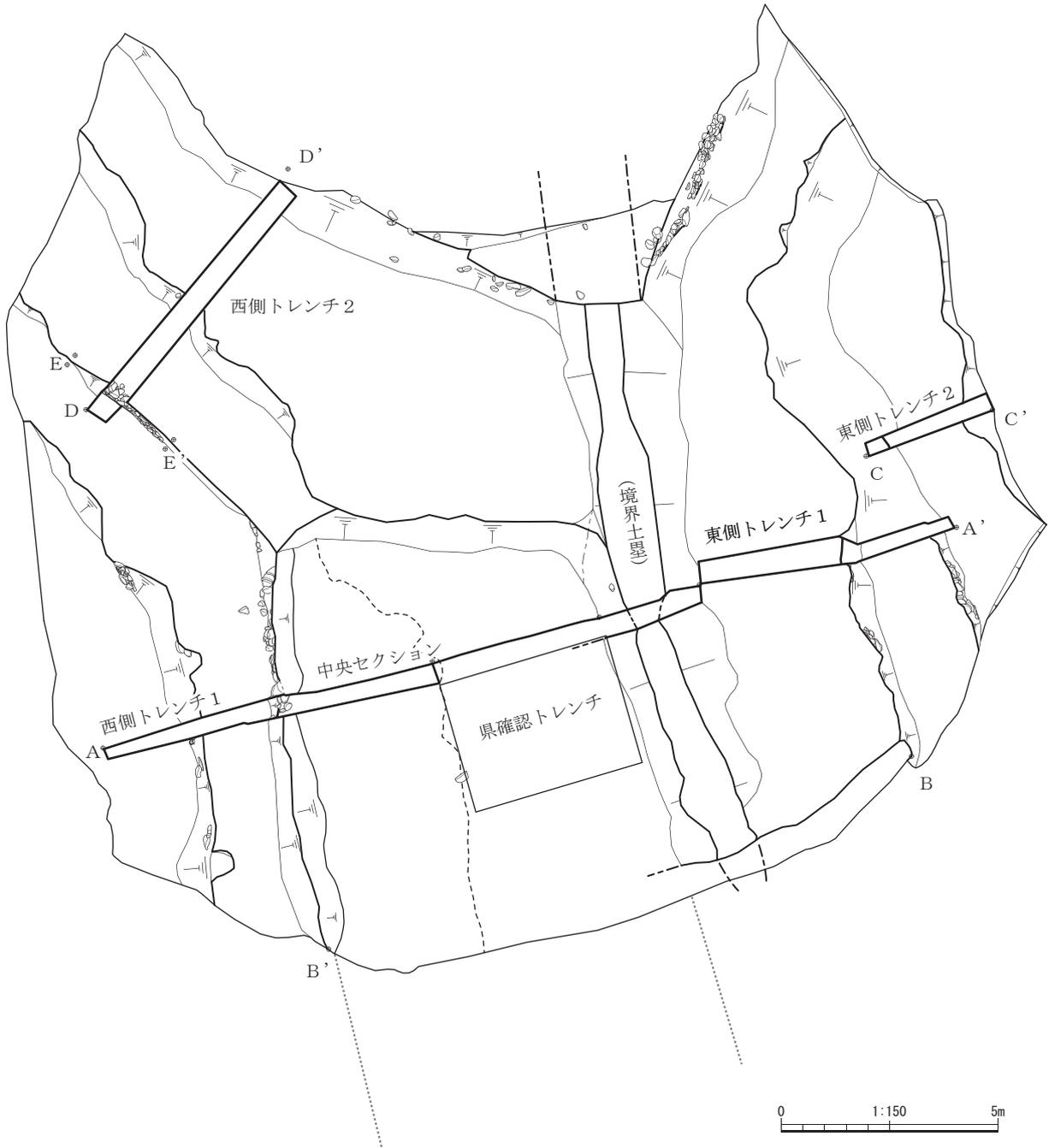


図4 遺構全体図 (1/150)

第4章 調査成果

調査地は、山頂の主郭部から南側山裾部に延びる尾根上に位置しており、西側には南に開く谷間部がある。調査地の東西部は、尾根の傾斜地を利用して、段々状の狭小な耕作地となっており、南北を縦断する境界土塁西側に調査地内で最も広い平坦部が形成されている。これまで、山頂の主郭との位置関係や現況の地形から、この平坦部を中心として調査地周辺が曲輪であると推定されてきた。

第1節 基本層序

天路山城跡の基本層序については以下の通り分類した。各断面土層図における枝番は対応していない。

第1層は黒色の腐葉土で表土、第2層はガラス等を含む近代以降の耕作土及び東西斜面の崩落土である。第3層は風化礫を含む固く締まった整地土層で、調査区全体で確認している。後述する曲輪部分では厚さ0.1m程度だが、東斜面及び北西部では第4層である盛土層が存在しない部分を補って耕作地としての平坦面を確保するためか、約0.4m堆積している部分も存在する。近世後期～近世末ごろの遺物を含む。調査区で確認した石垣は、土層の堆積状況から、近世後期以降の耕作地整備に伴い構築されたものとする。第4層は、小礫を大量に含んだ盛土層である。含有する大量の小礫は、第6層である軟質岩盤を整形した際に発生したものとみられ、平坦部を拡張する目的によるものと推定でき、第3層との関係性から近世以前の可能性が考えられる。第5層は、攪乱を受けた形跡のない自然堆積層で、上部層は土壌化しており、やや暗色を呈する。調査区平坦面西側で顕著に確認した。第6層は基盤層である軟質岩盤とその岩盤風化礫層である。調査区全体で確認した。

第4層以下遺物が出土していないが、近世以前に造成された可能性のある第4層及び第6層上面が曲輪面と考える。

第2節 遺構

調査地内に位置する平坦面がこれまで曲輪と推定されてきたことから、調査区をほぼ東西に横断するような位置でトレンチを設定し、断面土層を観察した。その結果、次のように造成状況を把握した。

調査地の平坦部周辺は、基盤層である第6層を人工的に削り出し、境界土塁の基底部と平坦面の一部を整形している。整形された第6層は、標高約37.0mで、南北方向の比高差はほぼない。一方、東西方向では、境界土塁の基底部から西に約4.4m付近で急激に第6層が落ち込むため、第5・6層上に第4層で最大約0.7mの盛土を行い、平坦面を確保しており、曲輪であったと考えられる。

この平坦面は、調査区の南側へ更に広がっており、調査区外の地形を考慮すると、この曲輪は、南北長約17m、東西幅約8mのやや不整形な長方形状で、面積は約136㎡と推定できる。

1 検出遺構

今回の調査では、曲輪に関連する遺構は確認できなかった。ただし、曲輪の東側に位置し、現在は境界土塁とされている箇所について、断割調査を実施した結果、盛土部分については近世末以降に造成されたものと判断したが、基底部については、第6層を人工的に削り出し、土塁状に整形していることが明らかになった。第6層を整形した時期を特定することができなかったものの、第6層上面が曲輪面と考えられることから、境界土塁基底部の整形時期も、曲輪造成時期までさかのぼる可能性がある。

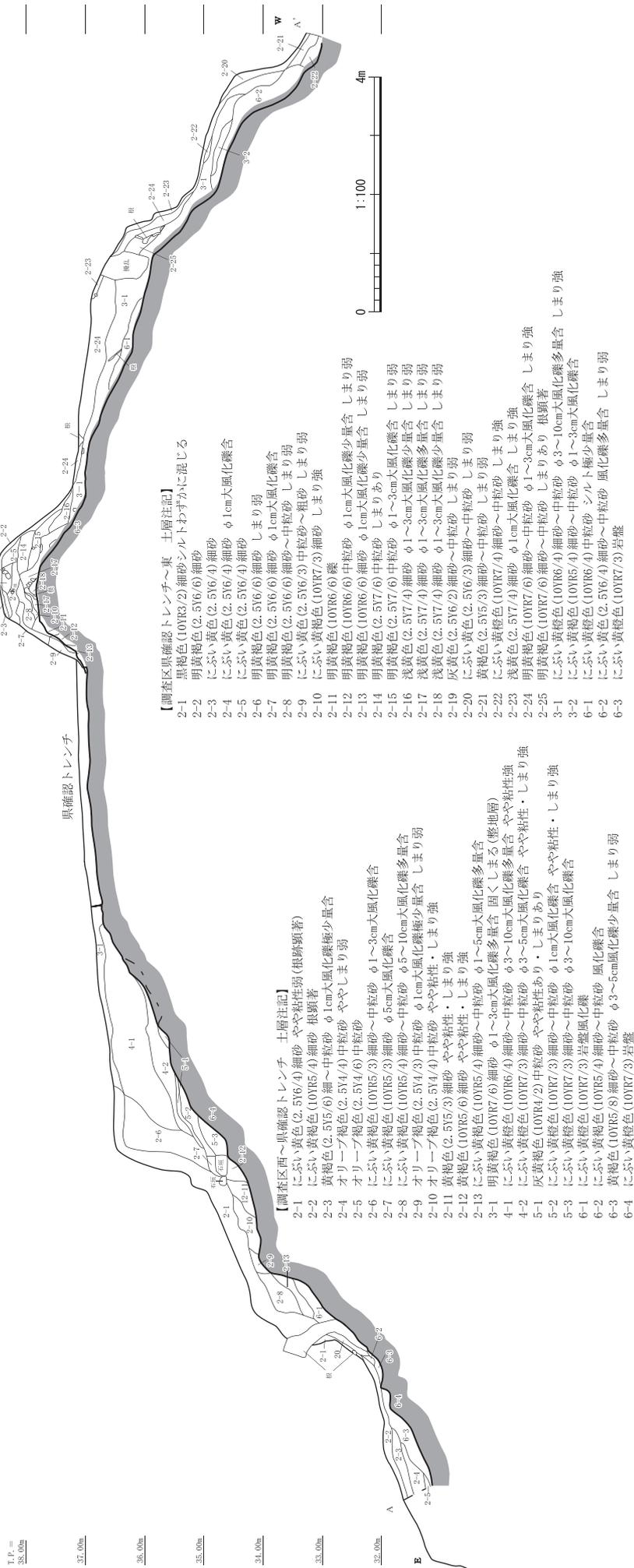


図5 調査区中央セクション断面土層図

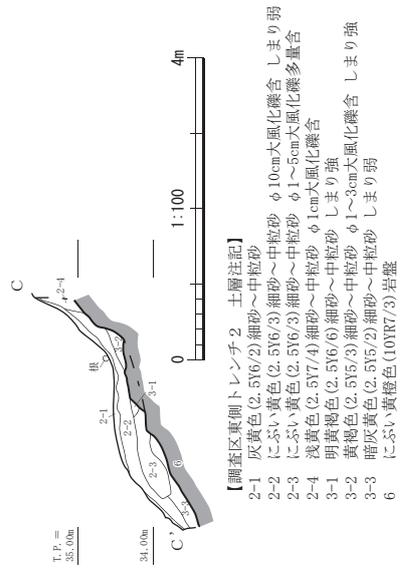
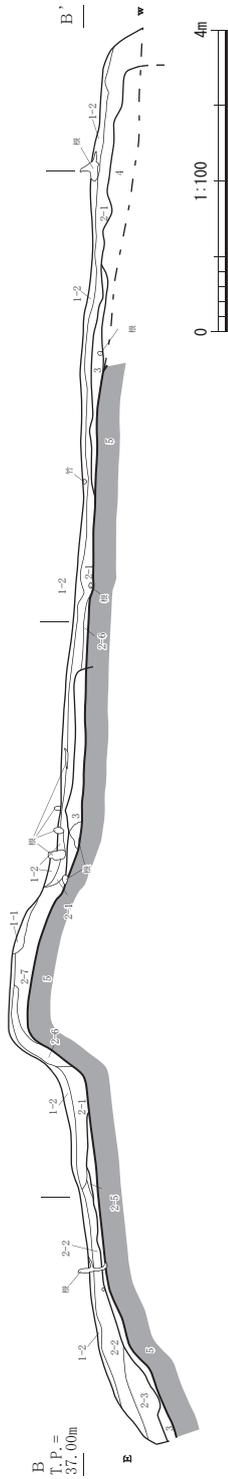


図6 調査区東側トレンチ2断面土層図



【調査区南壁 土層注記】

- 1-1 灰黄色(2.5Y7/2)中粒砂～粗砂 しまり強
- 1-2 黒褐色(10YR3/2)細砂シルト極少量含
- 2-1 灰黄色(2.5Y6/2)シルト混細砂 10YR7/2風化礫少量含 ややしまり強
- 2-2 浅黄色(2.5Y7/4)細砂～中粒砂シルトわずかに混じる にぶい黄橙色(10YR7/2)風化礫少量含 ややしま
り強
- 2-3 黄灰色(2.5Y5/1)細砂～中粒砂シルトわずかに混じる ややしまり強 根顕著
- 2-4 浅黄色(2.5Y7/4)細砂 ややしり強
- 2-5 にぶい黄色(2.5Y6/4)細砂 φ1～3cm風化礫含 ややしり強
- 2-6 浅黄橙色(10YR8/3)風化礫 同色中粒砂多量含
- 2-7 灰黄色(2.5Y7/2)風化礫 同色中粒砂～粗砂多量含
- 3 浅黄色(2.5Y7/4)シルト混細砂～中粒砂しまりあり にぶい黄橙色(10YR7/2)風化礫多量含 しまり強
- 4 にぶい黄褐色(10YR6/4)シルト混細砂～中粒砂 φ3～10cm大風化礫多量含 ややしり強
- 5 にぶい黄褐色(10YR7/3)岩盤層

図7 調査区南壁断面土層図

【調査区西側トレンチ2 土層注記】

- 2-1 にぶい黄褐色(10YR5/4)細砂～中粒砂 しまり弱
- 2-2 にぶい黄褐色(10YR5/3)細砂～中粒砂 しまり弱
- 2-3 灰黄褐色(10YR5/2)細砂 φ1cm大風化礫少量含
- 2-4 にぶい黄褐色(10YR7/3)細砂～中粒砂 φ1～3cm大風化礫含
- 2-5 灰黄褐色(10YR4/2)細砂～中粒砂 (特乱)
- 2-6 にぶい黄褐色(10YR5/4)細砂 しまり弱
- 2-7 オリーブ褐色(2.5Y4/6)細砂 しまり弱
- 2-8 にぶい黄色(2.5Y6/4)細砂～中粒砂 φ1cm大風化礫含 しまり強(石垣崩落土)
- 2-9 にぶい黄褐色(10YR4/3)細砂～中粒砂
- 3-1 にぶい黄褐色(10YR5/3)細砂～中粒砂
- 3-2 黄褐色(10YR7/8)細砂～中粒砂 φ1～3cm大風化礫含
- 3-3 明黄褐色(10YR6/6)細砂～中粒砂 しまり弱
- 3-4 黄褐色(10YR5/6)細砂～中粒砂 粘性弱
- 3-5 にぶい黄褐色(10YR5/3)細砂 粘性弱
- 3-6 明黄褐色(10YR6/6)細砂 φ1～5cm大風化礫含 しまり強
- 3-7 にぶい黄色(2.5Y6/4)細砂～中粒砂 φ1～5cm大風化礫多量含
- 5-1 にぶい黄褐色(10YR7/3)細砂 しまり強
- 6-1 にぶい黄褐色(10YR7/3)岩盤風化層 φ1～3cm大風化礫 にぶい黄褐色(10YR7/3)中粒砂～粗砂含
- 6-2 にぶい黄褐色(10YR7/3)岩盤風化層 φ1～10cm大風化礫
- 6-3 にぶい黄褐色(10YR7/3)岩盤風化層 φ5～10cm大風化礫
- 6-4 にぶい黄褐色(10YR7/3)岩盤

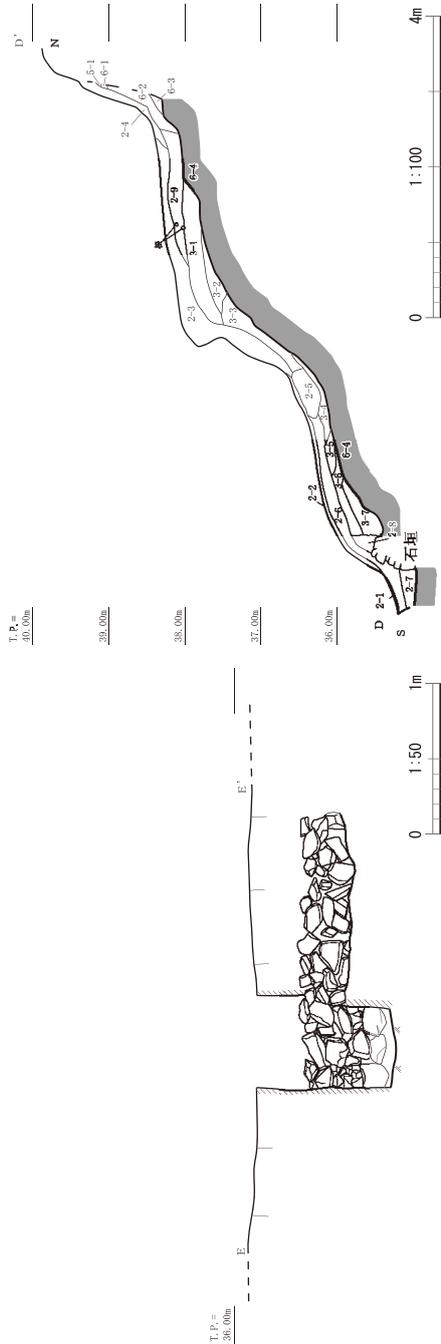


図8 西側トレンチ2石垣立面・断面土層図

第3節 出土遺物

今回の発掘調査で出土した遺物は総点数95点と少なく、大部分は調査地周辺が耕作地として整備された近世後期から近代にかけてのものである。

1は、須恵器の坏体部である。細片で時期を特定できないが古墳時代から古代の可能性が考えられる。2は、瓦質土器の鉢か。表面の摩滅が激しく、調整については詳細を確認できない。3は、陶器で壺の底部とみられる。瀬戸産か。4は、陶器の片口鉢。外面に白化粧が刷毛で塗られており、肥前系とみられる。5は、平瓦で二次焼成の痕跡がみられる。6は、石製品の硯である。石材については不明である。7は、磁器の瓶である。形状から徳利と思われ、外面の蛸唐草文から19世紀代とみられる。8は、陶器の行平鍋で瀬戸産とみられる。9は、瓦器の椀体部である。細片で時期を特定できないが、内面には調整痕が見られない。10は、磁器の皿である。内面に松竹梅文の一部が確認できることから18世紀前半ごろと考えられる。11は、陶器の碗だが、磁器の染付技法で製作された陶胎染付である。12は、磁器の皿で、紅皿。外面型押成形で内面と外面一部に施釉が確認でき、19世紀初頭とみられる。ミニチュアである可能性も残る。13は、銅製品でキセル吸口であるが、破損している。

天路山城で行われた戦闘行為については文献資料がなく、『古今年代記』によると天正13年(1585)、豊臣秀吉の紀州征伐に際し、城主である湯河弘春は秀吉の軍勢と対決せず、城に火を放ったとされているため、天路山城では戦闘が行われなかった可能性もある。更に天路山城において平時の居住空間は山裾平坦部であった可能性が高いため、今回の調査地のように構造物のない曲輪では平時における人々の活動に乏しく、結果として出土する遺物が少なかったと考えられる。

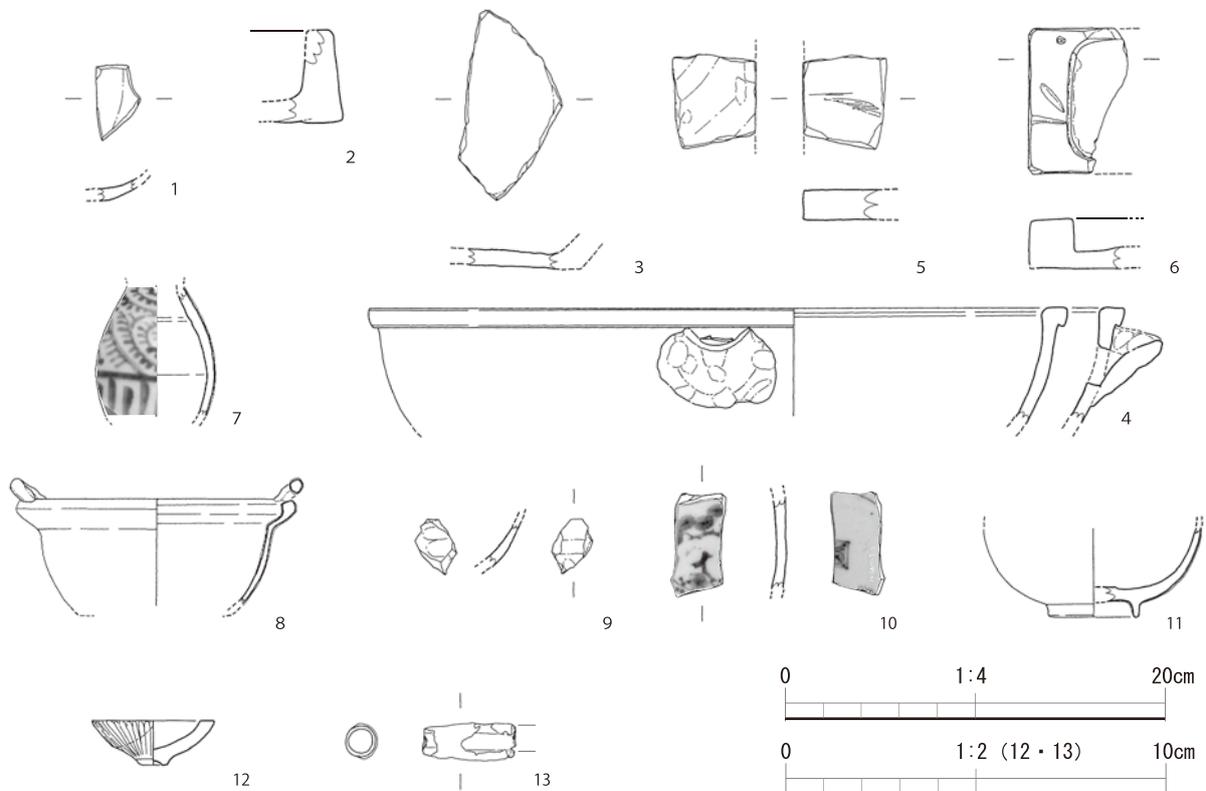


図9 出土遺物実測図

第5章 まとめ

第1節 発掘調査の成果について

現況の地形から曲輪と考えられていた調査地について、基盤となる軟質岩盤を人工的に削り出し、盛土によって平坦面を確保していること、現況の南北に延びる境界土塁基底が曲輪面を形成する第6層を整形して作られた状況が明らかになった。

曲輪と推定される平坦面が造成された時期については、第4層以下から遺物が出土していないことから断定することができない。また、境界土塁より東側では曲輪西端部のような盛土や岩盤層を整形しておらず、平坦面が造成された痕跡がない。これは城郭という遺跡の性質から東斜面からの攻勢に対する

防御と考えることもできる。

境界土塁基底は、第6層を整形した詳細な時期が不明であるものの、山頂部の主郭部と平時における居住地と考えられる山裾平坦部の「土居」との位置関係、調査地北壁でも人工的に整形されたと見える第6層を確認していること、調査地南側へ現況の境界土塁が更に延びること、山裾平坦部の「土居」周辺で北へ延びる盛土を一部であるが確認したこと等から、天路山城機能時に「土居」から山頂の主郭部まで連続する登城経路や斜路であった可能性が考えられる。廃城後もその機能が伝承された結果、現在の境界土塁へ形を変えて残った可能性も残る。この場合、今回の調査区は、平時においては主郭への通路や資材搬入のための中継地点、戦時においては見張り場所や防衛拠点として使われたものと考えることができる。

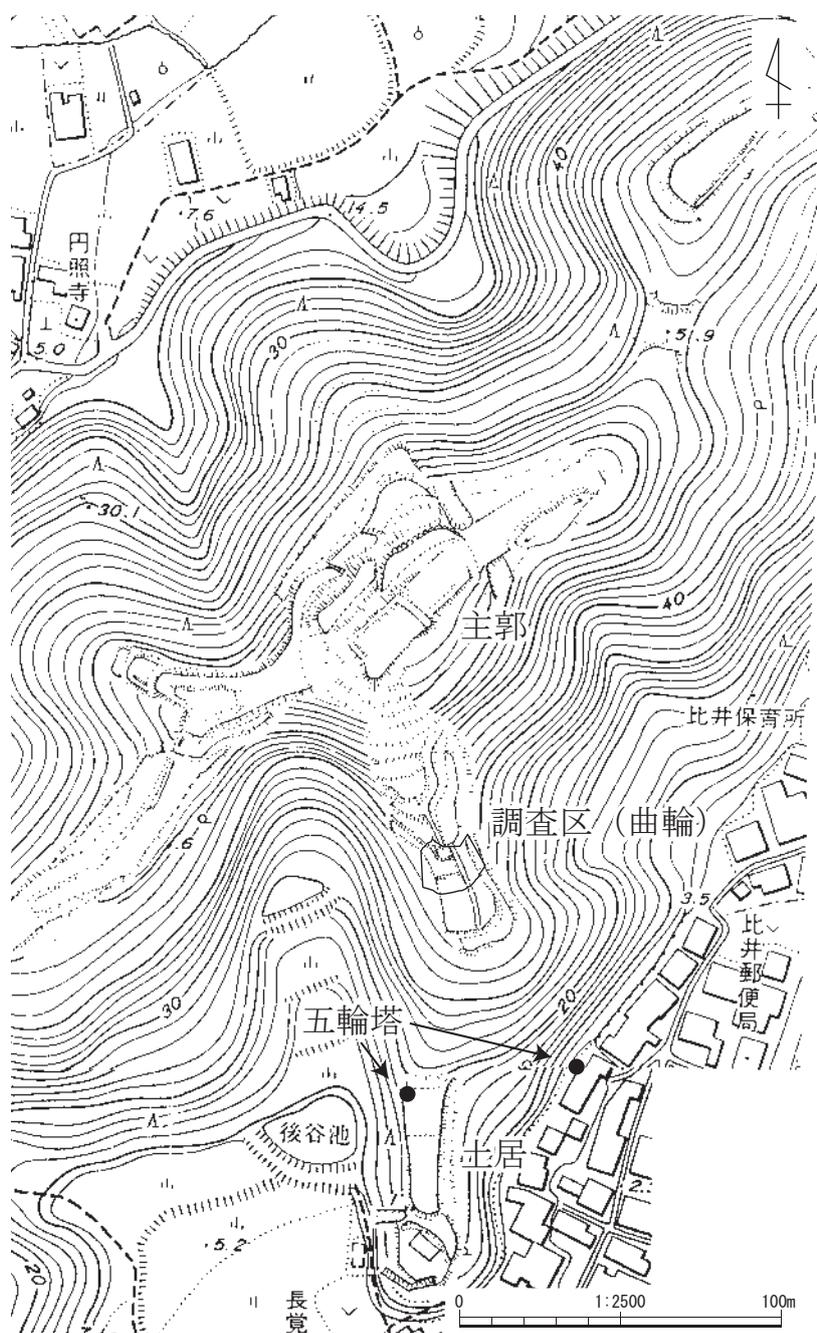


図10 天路山城縄張図 (白石博則氏作成)

第2節 縄張り図からみた天路山城と「土居」と呼称される範囲について

1988年に作成された天路山城跡の縄張り図では、今回の調査地周辺である主郭の南東部に「土居」と記載された箇所があり、「土居」北端部に五輪塔の記載が残る。これについては、現在五輪塔が現存する場所と記録された五輪塔の場所にずれが生じていることから、今回の調査地と山裾平坦部の「土居」とが混同されて記載されたと考えられる。白石博則氏が作成した縄張り図では、主郭の南側山裾平坦部を「土居」、今回発掘調査を実施した箇所を「曲輪」としており、更に山頂部にある主郭の周囲を囲む土塁が南側で途切れることから、主郭南側を南側の曲輪と主郭を繋ぐ出入口であったと想定している。工事によりこの部分が破壊されたため、両者の関係を直接的に確認することはできなくなったが、前述の発掘調査の成果から、白石氏の想定を補強することができる。

また、現在「土居」と呼称される付近で、組合式五輪塔を8基、五輪塔板碑を1基確認した。確認した五輪塔はいずれも砂岩製とみられ、このうち3基は現在「土居」の北端に所在する。残りの五輪塔についても、近隣住民への聞き取り調査から「『土居』と呼ばれているところから落ちてきたものだと伝え聞いている」ことが明らかになった^(註1)。これらの五輪塔については十分な調査が行われていないが、空輪の形状等からおおよそ中世後半～近世初頭の製作と推測でき、天路山城機能時に製作された可能性が高く、当該時期には天路山城を中心して人々の活発な活動を読み取ることができる。

【註1】 令和元年12月2日、当文化財センター職員及び日高町教育委員会職員で土居周辺に所在する五輪塔の確認と住民への聞き取り調査を実施し、明らかになった。

【参考文献】

九州近世陶磁学会編『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会10周年記念』2000年
白石博則「湯河氏関連城郭と天路山城」『日高町歴史講座 湯河氏の城—その歴史と魅力—』2019年
日高町教育委員会編「日高町の文化財 特集古城館砦跡」第7号 1988年
日高町誌編集委員会編『日高町誌』上・下巻 1977年
和歌山県日高郡編『日高郡誌』1923年

表2 出土遺物一覧

土器一覧 ()は復元による推定値

報告書番号	種類器種	調査区地区	遺構層位	口径cm	高さcm	底径cm	残存率	色調	形態・技法・特徴等
1	須恵器 坏		表土 (1層)	-	(1.2)	-	5% 以下	内) 5Y5/1 (灰) 外・断) 7.5Y6/1 (灰)	
2	瓦質土器 鉢?	東側トレンチ2	1層	(12.4)	4.9	(15.2 ~ 16.0?)	5%	内・外) N4/0 (灰) 断) N8/0 (灰白)	
3	瀬戸? 壺?	J9・i25	1層	-	(1.1)	-	5% 以下	内) 2.5Y5/2 (暗灰黄) 外) 5YR4/1 (褐灰) 断) 5YR6/6 (橙)	
4	肥前系 鍋 or 鉢	J10・11	1層	(36.6)	(5.6)	-	5%	釉) 10YR8/2 (灰白)、10YR5/2 (灰黄褐) 断) 2.5YR4/4 (にぶい赤褐)	唐津
7	磁器 瓶	J10・11	1~2層	-	(6.9)	-	5%	内) 10 Y 8/1 (灰白) 外) 7.5 G Y 8/1 (明緑灰) 断) 10 Y 8/1 (灰白)	外面: 蛸唐草文
8	陶器 雪平鍋	J10・11	1~2層	(14.2)	(6.8)	-	10%	釉) 10YR7/2 (にぶい黄褐) 断) 10 Y R 7/2 (にぶい黄褐)	
9	肥前系 碗	西側 トレンチ1	2層	-	(4.6)	(4.6)	30%	釉) 5G7/1 (明緑灰) 露) 2.5YR5/6 (明赤褐) 断) 5Y7/1 (灰白)	唐津、陶胎染付
10	磁器(染付) 皿 or 碗	J10・i25	2層	-	(0.7)	-	5% 以下	呉) 淡濃青 断) 5Y8/1 (灰白)	内面: 松竹梅文
11	瓦器 椀	J9・i24	2層	-	(2.4)	-	5% 以下	内・外) N4/0 (灰) 断) 7.5Y7/1 (灰白)	
12	磁器 紅皿	J10・i25	2層	(3.2)	1.15	(0.8)	25%	内) 9/0 (白) 外・断) 10Y8/1 (灰白)	内面・外面一部に施釉 B類

石製品一覧

報告書番号	種類器種	調査区地区	遺構層位	最大長cm	最大幅cm	最大厚cm	重さg	石材	残存率	備考
6	石製品 硯	J10・11	1層	(6.15)	7.6	2.6		不明 軟質	30%	

瓦一覧

報告書番号	種類器種	調査区地区	遺構層位	長さcm	厚さcm	幅cm	残存率	色調	形態・技法・特徴等
5	瓦 平瓦	J10・m2	1層	(4.3)	1.6	(4.9)	5%以下	内・外) 7.5YR6/3 (にぶい褐) 断) 10YR8/2 (灰白)	二次焼成

金属製品一覧

報告書番号	種類器種	調査区地区	遺構層位	長さcm	厚さcm	幅cm	残存率	素材	備考
13	金属製品 煙管	J9・k25	3層 (地山上面)	(2.45)	0.1	φ 0.9	30%	銅	



1 遺跡遠景(東から)



2 調査地全景(北上空から)



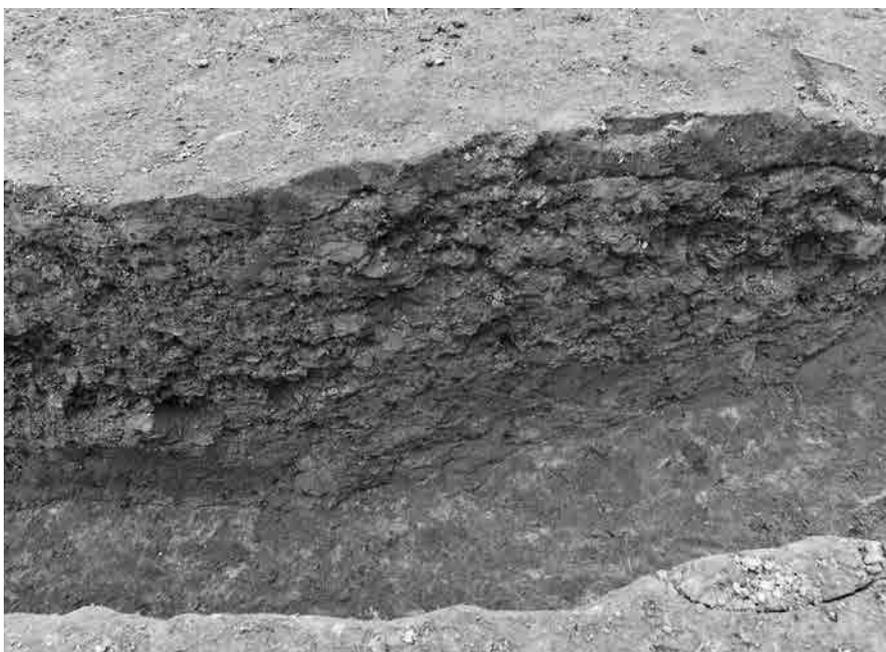
3 調査地全景(北から)



1 曲輪全景(北から)



2 曲輪西側盛土断面土層(南東から)



3 曲輪西側盛土断面土層細部(南から)



1 境界土塁と西側曲輪(北から)



2 境界土塁断面土層(北から)



3 調査区東側トレンチ1断面土層(北西から)



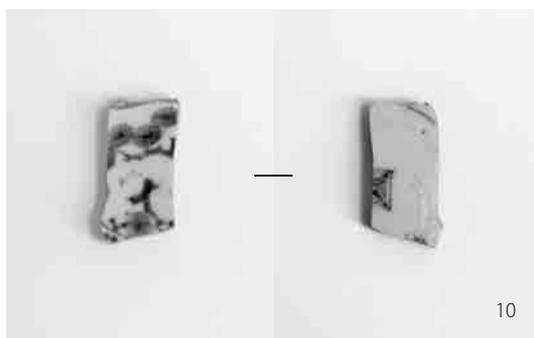
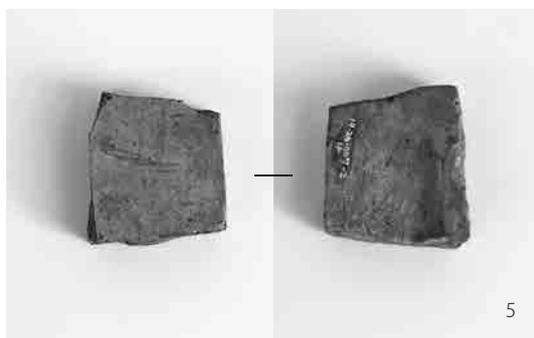
1 調査区西側トレンチ2石垣(南から)



2 南へ延びる境界土塁(北から)



3 土居近接地の五輪塔(南東から)



報告書抄録

ふりがな	てんじやまじょうあと							
書名	天路山城跡							
副書名	比井漁港漁村再生交付金事業に伴う							
巻次	——							
シリーズ名	——							
シリーズ番号	——							
編著者名	濱崎範子							
編集機関	公益財団法人 和歌山県文化財センター							
所在地	〒 640-8301 和歌山市岩橋 1263 番地の 1				TEL	073 - 472 - 3710		
発行年月日	西暦 2020 年 1 月 24 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 〃 〃	東経 〃 〃	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
てんじやまじょうあと 天路山城跡	わかやまけん 和歌山県 ひだかぐん ひだかちょう 日高郡 日高町	303828	7	33° 55′ 20″	135° 4′ 53″	20191028 ～ 20191203	360	比井漁港漁村再生交付金事業に伴う比井漁港集落道路改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
天路山城跡	城跡	中世	曲輪		瓦器			
		江戸時代 ～近代	整地層・石垣		土師器、陶磁器、瓦、石製品、金属製品等			
要約	<p>曲輪は基盤層となる岩盤を人工的に削り出して形成されており、調査区を南北に延びる現況の境界土塁基底も曲輪と同じく、岩盤を人工的に削り出していることが明らかになった。出土遺物が伴わず構築時期が明確にはならなかったが、天路山城機能時のものと考えられる。</p> <p>今回の調査地は、天路山城跡山頂にある主郭部分と山裾平坦部の土居と呼称される部分の中間に位置しており、平時は見張り場や土居から主郭への中継地点として、戦時においては防御のための曲輪として活用されたと推定する。</p>							

天路山城跡

－比井漁港漁村再生交付金事業に伴う発掘調査報告書－

発行年月日：2020年1月24日

編集・発行：公益財団法人和歌山県文化財センター

和歌山県和歌山市岩橋1263番地の1

印刷・製本：株式会社 協和

和歌山県海南市赤坂5-3